



Title	『夜窓鬼談』における「鬼索債譚」の改作と展開について：「鬼兒」を中心に
Author(s)	轟, 晶
Citation	大阪大学言語文化学. 2015, 24, p. 47-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『夜窓鬼談』における「鬼索債譚」の改作と展開について

—「鬼兒」を中心に—*

聶 晶**

キーワード：『夜窓鬼談』、「鬼兒」、「もう半分」

随着飞鸟时代佛教的传入，因果报应、转世轮回等思想开始在日本传播，并对其后的文学、文艺创作均产生了极为深远的影响。

所谓转世，即指生物体死亡后，其意识、灵魂等以新肉体或另一形式重生的现象。最初为印度教、锡克教、耆那教等教派与哲学的主要信条之一，后伴随佛教信仰的传播而成为一种重要的创作素材被广泛使用。但由于创作手法与表现技巧的不同，同类作品之间既有相似点，又存在着差异。

日本明治汉文怪异小说集《夜窓鬼談》中亦有一篇转生故事——上卷第14篇之《鬼兒》。描写了失金者投水自尽后，托生为盗金者之子，从而进行报复的劝惩故事。通过对作品情节与故事来源的分析，可知此作并非作者原创，而是在落语作品《もう半分》的基础上进行加工改编而成的。

本论从情节设定、娱乐性“包袱”的有无、以及描写手法这三个方面对《鬼兒》与《もう半分》进行了比较，就其改作特征、产生背景，以及创作目的等作了较为明确的论述。

就改作特征而言：(1)《鬼兒》虽在视觉表现力上较《もう半分》稍弱，然而由于作者极为深刻地强调了故事中的因果报应，而使其更具劝惩教化意义；(2)由于艺术表现方式的不同，《鬼兒》仅采纳了《もう半分》中关于转世复仇这一部分的情节，而将其原本的“包袱”（即“もう半分”的前后呼应部分）省略了。这可以认为是不同形式作品改编过程中的二次创作。(3)《鬼兒》的作者尤为擅长文字表现。在复仇场景描写中，多用三、四字短文叠加的方式进行记叙。这既让读者身临其境，也使得故事发展更具有层层推进感。

从情节源流与产生背景来看，《鬼兒》与《もう半分》均同中国“鬼索债”类故事有着密不可分的关系。《鬼兒》的作者石川鸿斋在佛教因果、转世思想和中国故事的基础上，进一步融合了日本民间传说、江户町人道德观等元素，从而将《もう半分》大刀阔斧地改编成为极具劝善意义的作品。同时，从小说的序文、凡例、以及出版物中所附插画与训点等方面，亦不难看出作者启蒙汉学、教育后人的意图。

* 关于《夜窓鬼談》中“鬼索債”故事改作情况的相关讨论
—以《鬼兒》为中心—(聶晶 NIE Jing)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

飛鳥時代に、仏教が伝来したことにより、因果応報や転生などの思想が日本に入ってきた。これは文字文学と口承文芸にも深い影響を与えた。

転生とは、生まれ変わるということを目指す。転生する前の人生のことを「前世」、転生した後の人生のことを「来世」と呼ぶ。これは、もともとインドやギリシアなどの地区の古代宗教と哲学思想の一つであるが、仏教の輪廻思想と共に日本で広く伝播している。また、「日本人の靈魂観には靈は不滅、循環するとの考えがあり、それは特に死に際し、生への靈の継承として意識された¹。」これに関する物語は、題材の違いによって、「転生奇遇譚」、「転生復讐譚」、「転生恩返し譚」、「転生恋愛譚」などに分類され、古今日本の文学や文芸作品に多く記載されている。しかし、創作の手法と表現の技巧が異なるため、同様のモチーフの作品には、ジャンルを超えて共通するものと、それぞれに独自の特徴を持つものがある。

日本明治期の漢文怪異小説集の『夜窓鬼談』²の中には、一編の転生復讐譚がある。それは、「鬼兒」という作品であり、金を盗まれた者が自殺した後、金を盗んだ犯人の子供として転生して復讐するという勧善懲悪を描いた物語である。この類の話は、「鬼索債譚」とも呼ばれ、もともと「中国怪談の一類型で、『借金を踏み足されたまま死んだ人間の子に転生し、浪費することによって借金を取り返す』という物語³」に基づいて発展してきたのである。

それでは、漢文怪異小説としての「鬼兒」はどのような特徴があるのか。類話との間にどのような共通点と相違点があるのか。さらにこの一類の物語には、どのような成立背景があるのか。これらの問題を解明するために、小論は、「鬼兒」という転生復讐譚を中心にし、作品の改作状況という側面から比較・分析を行い、作品の特徴、成立の背景を解明しようとする。

2 先行研究

Wolfram Eberhard は、『中国民間故事類型』の中で、「鬼索債譚」というモチーフの物語を「宿怨を返す」類型に分類し、「典型的仏教から取り上げた題材であり、中国には長い歴史と大量の類話が存在している⁴」と指摘している。「鬼索債譚」が「日本への伝播は、『日本靈異記』に始まるが、中世まではあまり定着しなかったようである。江

¹ 桜井徳太郎『民間信仰辞典』、東京堂出版、1984、p.39。

² 石川鴻斎著、吾妻健三郎編、東陽堂支店、1889。

³ 福田素子「鬼討債説話の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、東京大学文学部中国語中国文学研究室、2006、p.23。

⁴ Wolfram Eberhard 著、王燕生ほか訳、商務印書館、1999、pp.228-229。

戸時代に入ると筆記小説に中国の翻案ものが散見されるようになる⁵。」と同時に、各地の民話及び、仏教説話の中にも多く存在し、民俗学上で「こんな晩」型の物語と呼ばれ、「異人殺し」という伝承とも関係があると思われる。

「鬼索債譚」について、日本人の学者は、主に仏教説話と中国系物語からの受容、作品の成立背景と源流、宗教と民俗信仰からの伝承などを中心に研究している。また、同じ主題の類話との比較考察も盛んに行われている。例えば、丸山顕徳（1990）は『日本霊異記』の討債鬼説話と食人鬼説話⁶という論文の中で、「鬼索債譚」というモチーフの流れを分析し、それは中国から伝来したものであるという結論を出した。後小路薫（2010）は、「近世説話の位相—鬼索債譚をめぐって—」⁷という論文の中で、事実譚、仮名草子、中国系物語及び、仏教唱導文における「鬼索債譚」を調査し、このモチーフの流行背景と理由を分析した。また、福田素子（2012）は、中国の怪談からの受容と変容という方面から、落語の「もう半分」を中心とし、中国の「鬼索債譚」を比較することにより、作品の性質を明らかにした。さらに、「もう半分」と『夜窓鬼談』の「鬼兒」及び、口演筆記の「正直清兵衛」との相違点と共通点についても言及した⁸。ただし、「鬼兒」における改作状況についての問題点に触れる研究は管見では見当たらない。

3『夜窓鬼談』における「鬼索債譚」——「鬼兒」

『夜窓鬼談』は、幕末明治の漢文学者の石川鴻斎⁹が書いた漢文怪異小説であり、上巻と下巻全81編で、それぞれは明治22年（1889）と明治27年（1894）に出版された。その上巻の第14編である「鬼兒」¹⁰の現代日本語の訳を以下に掲げる。

江戸は神田に住む、甚兵といい、毎晩路頭で蕎麦を売っている人がいた。酒が好きで、のんべえ、家が貧しく歳は50を過ぎていて、早くに妻を亡くしていた。ただ、甚兵には一人娘がいた。娘は器量もよく孝行ものである。歳末の頃、娘は父親がかなりの借金を抱えていたことを憂えているため、吉原に身を売ってその困窮を救いたいと思うが、甚兵は娘の苦心に気づいてためらって心が定まらない。そうこうしているうちに、甚兵がまたに病に罹り、数ヶ月間家で養生し商売もできなくなった。毎日のように借金を返すよう毎日催促されている。やむを得ず、娘を売ることを吉原のある店と約束し、病氣

⁵ 福田素子「鬼討債説話の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、東京大学文学部中国語中国文学研究室、2006、p.43。

⁶ 坂本信幸ほか編『論集古代歌と説話』、和泉書院、1990、pp.219-237。

⁷ 『勸化本の研究』、和泉書院、2010、pp.288-301。

⁸ 「落語『もう半分』に見る中国怪談・討債鬼故事の受容と変容」、『中国—社会と文化』第27号、中国社会文化学会、2012、pp.212-226。

⁹ (1833-1918) 日本の詩文家、漢学者、画家。本名は英、字は君華。芝山外史、雲泥居士などの号がある。

¹⁰ 王三慶ほか編『日本漢文小説叢刊』（第1輯・第2冊）、台湾学生書局、2003、p.361。

が少しよくなると、娘を連れて吉原に行き、50両を得た。踉蹌として帰ると、とっぶり深夜になってしまった。

蔵前を過ぎた辺りから、風が強く吹雪になってきた。寒さに耐えられない甚兵が酒を飲んで体を暖めるために、行き着けの居酒屋に入った。甚兵との知り合いの亭主は彼の困窮振りを知っていた。酒をあまり飲ませようとしなかった。しかし、甚兵が主人に娘を売った顛末を話すと、主人は驚き同情し、また甚兵が金を持っていることを知ったので、心ゆくまで酒を飲ませた。甚兵は喜んで、懐爐を抱えていっぱい飲んだ。最後の一杯を飲み干すと、甚兵は金を払い、店を出た。酔って歩いていくと、道にはかなりの雪が積もっていた。蔵前の亭主も閉店し、戸口を閉めて酒具を片付けの作業に入った。その妻は、甚兵の座っていた所に財布を見つけ、悪心が芽生え財布を隠した。

やがて、戸口の戸を叩く者がいた。誰かと聞くと。甚兵であった。彼は、「さっき置き忘れた財布があると思う。先ほど座っていた所の懐爐の近くに置いているはずだ」と言った。しかし、居酒屋に入り蠟燭で照らすと、何もなかった。亭主の妻は、「あなたは相当酔っ払っているのだから、帰り道に落としたりしないでしょうか。外は真っ暗だし、誰もいない。早く探さないと、この雪に覆われてしまっているかもしれないですよ。今来た道中を早く提灯を照らして、探してみてもいいかが」と答え、甚兵に提灯を貸した。甚兵は彼女に感謝して去って行ってしまった。道中を探したが、何もなかった。帰路、自分の情けなさを顧みて、もう万事休したのだと嘆いた。そして川に投身して死んでしまった。

一方、居酒屋の妻は隠した金を夫に見せて言った。「本当は私がこの大金の財布を隠したのです。数年間ずっと裕福になれなくて、ほかの人の富みを羨むだけでした。今日は幸いに多くの金を手に入れました。これは神さまから頂いたのです。これを使って借金を返し、店を拡大しましょうよ」と。亭主も同意した。

それから、家がいよいよ豊かになり、本当に金持ちになった。しかし子供ができないので、夫婦が悩んでいる。神仏に願うと、40歳の時に、ついに念願の子供を授かった。しかし、生まれてから、ほとんど泣かなく、まだ三か月が経たないうちに歯は生え揃い、髪には白髪が混じって、さらに顔にも皺が寄り、甚兵と似ている。1歳になると、歩くことができ、他の子供たちと遊ばない。毎日物を壊して障子を破り、または筆で帳簿を汚したりもする。店主夫婦は色々と苦悩した。

ある日、母親が服を縫っている。不要な布の中には、甚兵の財布があった。息子が財布を見ると、嬉しがって庭から砂を財布に詰め、母親に見せて言った。「金が50両ある。この金で美しい着物を買ってくれ」と。母親は愕然として夫を呼んできた。この話を告げると、父親は怒り息子を叱りつけて殴った。すると、息子は大声で叫んで発狂してい

た。やむを得ず、息子の足と手を掴んで寝かすと、急に高熱にうなされるようになり、汗が布団を濡らすのだ。急いで医者を呼び診察させたが、どうすることもできない。息子はますます激しく大声で叫んで、夜、隣人も眠ることができなかった。夜中になると、野獣のような声で叫んで、息子の額から一寸余りの角が生え、口が大きく裂け、目も丸く見開かれ、ついに鬼のような姿になった。妻は恐ろしくなり、しきりに夫を呼んだ。亭主は何も言わずに息子を殺そうとしたが、息子は縛られていた紐を振り切って母の膝に飛び乗って乳に噛みついて、母は気を失い倒れてしまい、だらだらと血が流れていても口が離さない。激怒した父親は拳で息子を殴りつけると、父親に「お前らは金を盗んだことを忘れたのか」と叫んでいて、父親の喉にも喰らい付こうとする。父は力の限り息子を膝に伏させ、下男に鉄の分銅を取りに来させ、力任せに息子を打ち続けると、息子はやがて息がようやくなくなった。翌日、密かにその死体を葬った。

その後、妻の怪我は数ヶ月で治らず、毎夜高熱で「甚兵が来る。甚兵が私のことを苦しめる」と言った。亭主が蠟燭で照らすと何もない。ただ一団の鬼火が飄然として窓から出ていった。病気で半年後、妻が苦しんで死んだ。その後、店は何度も盗難が続き、最後には、他人のものになってしまったという。

古いことわざには、「貨悖りて入る者は、また悖りて出づ。」という話がある。これは信じなければならぬだろう。林屋某がこの話をした。

「鬼兒」の最後には「林屋某所話」という記載がある。これは落語家の林屋氏を指すと考えられる。この推測が成立するなら、本篇は、落語にヒントを得た可能性が高いのである。これに基づき、今日伝わる落語の演目を調べると、その中で「もう半分」という落語がそれに相当する。

4 落語の「もう半分」

「もう半分」は、「五勺酒」とも言われ、永代橋のたもとにある居酒屋を舞台とした作品である。『口演速記明治大正落語集成』によると、そのあらすじは、次のようである。

永代橋脇に一軒の居酒屋がある。毎晩やってくる老人がおり、いつも茶碗に半分ずつ注いで「もう半分」「もう半分」と杯を重ねていった。ある日、老人は酔っぱらって出ていったが、娘を吉原に身を売って得た50両を包んだ風呂敷を居酒屋に忘れてしまった。しかし、居酒屋の亭主夫婦はこの金を密かに隠した。老人は金を失ったことに気づくと、店に戻ってきたが、主人夫婦は知らないと答え、老人を店から追い出してしまう。絶望した老人は橋から身を投げて死んでしまった。

この後、居酒屋夫婦はその金で店を大きくし、金持ちになった。その後、妻は子供を生んだが、この赤ちゃんが死んだ老人と似ていたので、妻は恐ろしさのあまり死んでしまった。店主は乳母を雇うが、乳母がみんな一晩で辞めてしまう。ある夜、主人は乳母と赤ん坊が寝ている隣の部屋に隠れ、何があるかを見届けることにした。真夜中にその赤ん坊が起きて行灯の油を飲んでいて、怒った主人は部屋へ飛び込むと、赤ん坊は茶碗を差し出して、「もう半分」と言ったという¹¹。

この話は初代三遊亭円朝¹²の作で、弟子の初代三遊亭円左¹³の速記によると、その居酒屋の場所は永代橋の傍にあるが、その後、五代目古今亭志生が舞台を小塚原や千住大橋と改編した。ただし、創作の時代を比較すると、「鬼兒」は明治22年(1889)に『夜窓鬼談』の上巻に含まれて出版したので、初代三遊亭円朝のバージョン、これは永代橋版から影響を受けていることと推測できる。

5 「鬼兒」と「もう半分」との相違及び、改作について

内容上からみると、「鬼兒」は「もう半分」と同じように、金を失った人が自殺した後、加害者の子供として転生するというプロットが使われているが、細かい設定には異なるところがある。本節は、プロットとオチの設定及び、描写手法という側面から「鬼兒」の改作状況を分析しようと思う。

5.1 プロットとオチの設定

落語の「もう半分」の冒頭、老人が「茶碗に半分ずつ注いで『もう半分』『もう半分』と杯を重ねて行って飲んだ」という癖が述べられている。また、最後には、赤ん坊が茶碗を突きだし、老人そっくりな顔で「もう半分」と言っているのを主人が見たと描かれる。この二つの設定は「もう半分」という落語の題目に呼応させたものである。こうすると、落語を最後まで聞いた観衆は突然に恐怖感が増し、心理上の感覚も増大したのだろう。

一方、「鬼兒」の場合には、老人が酒を半分ずつ飲むという設定を削り、これに倣い後半部分にも赤ちゃんの怪異を「油を半分ずつ飲む」ということから「鬼になる」ということに変更した。そして、子供が母の乳を嘔み、親が金を盗んだ前科を暴き、最後には、父親に殴られ死んで幽霊になり、日々祟りを起こす。数年後、店主の家は落ちぶれ

¹¹ 暉峻康隆ほか編『口演速記明治大正落語集成』第五巻、講談社、1980、pp.163-168。

¹² (1839-1900) 本名は出淵次郎吉。

¹³ (1848-1909) 本名は小泉熊山。

ることになった。このように改作したことにより、落語の「もう半分」より、作品の演劇性は減らされたが、物語の内容がより長く複雑になり、話の完成度も高くなる。特に、復讐の内容を詳しく描写すると、勸善懲悪の意識も強調されたと考えられる。

ただし、この改作の理由は単なる「鬼兒」における因果応報という思想を強めることだけではなく、落語の特徴及び、小説の創作方法も関わっていると考えられる。すなわち、落語の演目には高い演劇性が必要という特徴があるので、「もう半分」という一言は、落語の最終のオチとして作られてきたのであろう。しかし、「鬼兒」の場合には、「もう半分」という落語作品に含まれている転生復讐の要素だけを取り上げたので、そのオチの存在する意味もなくなった。もちろん、石川鴻斎のオリジナルの可能性もあるかもしれないが、この小説の文字表現と落語の口頭表現との創作の相違点も無視できないと考えられる。

5.2 描写手法

落語は伝統の話芸として演者の身振りや手振りなどの仕草と小道具によって視覚表現力は小説より高く、観衆にも理解しやすいという特徴があるので、石川鴻斎は小説の不足を補うために、長い筆舌で描写することに多くの工夫を凝らし、特に鬼兒が復讐する部分を細かく描写した。その内容は次の通りである。

まず、「妻始生一子、生而不甚泣、未三月、齒盡生、宣髮皴面、恍似甚兵。」鬼兒は生まれてから、ほとんど泣かなく、まだ三か月も経たないのに、歯は生え揃い、老者のような白髪と皺が生じ、甚兵の姿と似ているという描写がある。普通の子供との異なる外貌、特に甚兵と似ているという鬼兒の様子が描かれ、いよいよ復讐話が始まる事を読者に予感させるのである。

次に、「周歲能歩、不欲與他兒同遊、日碎器物、破帷障、或把筆塗抹帳簿、使不可讀、夫妻甚苦之。」一歳になると歩くことができ、他の子供たちと遊ばず、毎日物を壊し、障子を破り、筆で帳簿を汚した。この一連の描写は、鬼兒の転生の目的、すなわち、店主夫婦を苦しめるために生まれてきたことを表している。これはその後の本格的な復讐の前兆と言える。直接に命を奪うのではなく、精神的に追い詰めたということである。

そして、「一日、妻縫衣、認藍襖中有甚兵財囊、兒喜玩之、自至庭盛沙石示母曰、有金五十兩、請購求美衣。」鬼兒は、母が盗んだ甚兵の財布を持ち、母に新しい着物を求めることによって、冗談という形で母が犯した罪を再度意識させている。

その後、「母愕然、呼夫告之。夫惡之、怒批之。兒大叫、狂暴不可制。不得已、縛手足、使臥褥、發熱如火、流汗濡褥、急招醫診之。醫亦不能藥、而號叫益甚。入夜、四鄰不能睡。」父親が怒って鬼兒を叱りつけると、息子は大声で叫び、高熱が出た。医者呼び

診察させたが、どうすることもできず、鬼兒はますます激しく叫んだという。この場面は、子供が鬼になる前の状態を描写し、復讐前の最後の緊張を書いている。

最後に、「夜半、一聲如哮、額上生肉角、長寸餘、巨口圓眼、面如夜叉。妻大驚、頻呼其夫。夫視而不言、將殺之。兒釋縛、躍上母膝、探乳齧之。母絶倒、血流淋漓、口尚不離。父大忿、堅拳擊之、兒漸放、向父曰、汝竊金之事、忘乎否。直欲齧其喉。」夜中になると、息子は鬼のような姿になった。父は彼を殺そうとしたが、鬼兒は縛られていた紐を裂き、母を襲った。激怒した父が拳で撃ちつけると、鬼兒は父親に「金を盗んだことを忘れたのか。」と叫び、父親の喉に噛みつこうとした。この一段の文字数は多くないが、「生」、「驚」、「呼」、「視」、「言」、「殺」、「釋」、「躍」、「探」、「齧」、「絶倒」、「流」、「離」、「忿」、「擊」、「放」、「向」、「曰」、「竊」、「忘」、「齧」の21字の動詞がある。これらの動詞を通じ、鬼兒の様子、店主夫婦の反応、また親子の間の闘いというアクションシーンを描き、文字の力で父への抵抗と母への復讐という具体的な場面を読者に見せた。

その描写は、読者の恐怖心を駆り立てるべく、短い三句や四句で畳みかけている。読者は、自分の目で作者の実演を見なくても、そのリズムある表現によって、物語の発生過程を体験することができる。また、この徐々に近づく復讐への歩みも、「もう半分」よりさらに豊かになる。店主夫婦が罰を受けるのを詳しく描写することによって、読者の悪を裁く心理を満足させている。

6 成立の背景

前述したように「命と財産を奪われた被害者が加害者の子供として転生した後、前世の宿怨を復讐する」というモチーフは、もともと中国から伝来し、仏教説話の「殺生譚」と融合した上で、日本の文学作品と民話に影響を与えている。中込重明（1993）は、「落語の『もう半分』と『疝気の虫』の形成」¹⁴という論文の中で、「もう半分」の先行作品を調査し、井原西鶴の『万の文反古』（1696）、『善悪報ばなし』（年代不詳）や『新著聞集』（1749）巻四の「殺害の僧子となって家を滅ぼす」などの多く類話を例としてあげている。

類話の内容を比較すれば、人を殺して財産を奪い、手に入れた金で金持ちになったが、生まれた子供が殺された人の生まれ変わりであり、昔の罪を暴き出す、或いは復讐するというプロットは基本的な流れであることが分かる。結末の種類からみると、罪を暴く言葉を発するままで終わるバージョン、驚いた主人が頓死するバージョン、天罰または転生した子供によって殺されるバージョン及び、家が没落するバージョンなどがある。

¹⁴『法政大学大学院紀要』第30号、法政大学大学院、1993、pp.238-220。

これらの同様の物語が存在することから、このモチーフは、偶然に生まれたものではない、当時の社会基礎の上に成立したものであらうと考えられる。

「江戸時代、幕府は国を導く精神的支柱として、儒教の主流である朱子学を採用した。そのため、儒家の重んじる徳目、中でも、目上に対する従順の意味を含む『孝』、『忠』は、民衆教化の中で大きな比重を占めた¹⁵⁾」特に、当時の江戸幕府は統治と教化のために、忠義や親孝行などの思想を武士や庶民に徹底させた。このような社会背景の下で、不孝を悪とする考えが生じ、多くの勧善懲悪を描いた作品に散見された。「徳川政権下における貨幣経済の発達や子弟の滅財放蕩を不孝の極みとみなす町人道德の浸透を説話生成の歴史背景として、江戸中期の唱導と文芸に鬼索債譚が援用され(た)¹⁶⁾」のも当然であらう。

また、転生した子供が親を殺す、或いは家を潰すなどの不孝の源は、被害者が前世で親である者に既に殺され、金が奪われていたことに関わりがある。この世の「悪」は、すなわち、前世の「悪」の故である。前世の被害者は、転生してこの世で加害者となり、前世の加害者はこの世で被害者となる。これを繰り返して、輪廻で因果応報の循環が出来上がったのである。この方面から仏教説話から受けた影響が示されている。

7 創作の目的

落語は江戸時代の日本で成立し、現在まで伝承されている伝統的な話芸の一種である。これは、娯楽性を中心として演じられるものである。それに対して、漢文小説の「鬼兒」は、教訓性を中心として作られてきたものであると言える。そのことは、小説の最後にある評から見てとれる。

作者は敢えて文末に、「古語所謂、貨悖而入者、亦悖而出。」という一文を加えた。筆者の調査によると、これは『大学章句第十章』¹⁷⁾から引用した文である。原文は「是故言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出¹⁸⁾。(このゆえに言悖って出ざる者は、また悖って入る。貨悖って入る者は、また悖って出ず。)」であり、このように君主に徳がなく道にそむいて政令を出せば、民衆の怨嗟の声が返ってくる。人の道に背いて手に入れた財貨は、思いもかけないところで無くなってしまうという意味である。すなわち、「悪銭身につかず」ということを言明する。この評から、作者は教訓を読者に与えているこ

¹⁵⁾ 佐野大介「孝子の顕彰」、『江戸時代の親孝行』、大阪大学出版会、2009、p.29。

¹⁶⁾ 堤邦彦『江戸の怪異談』、株式会社ペリかん社、2004、p.320。

¹⁷⁾ 『大学』は儒教の経書の一つ。元来は五経の一つである『礼記』の一編であり、儒教の政治思想の根幹をきわめて要領よくまとめたもので、南宋以降、『中庸』『論語』『孟子』と合わせて四書とされた。曾子によって作られたとも秦漢の儒家によって作られたとも言われる。

¹⁸⁾ 胡廣ら 奉勅撰、汪份 増訂、吉村晉【秋陽】點、『和刻本四書大全 1 大学章句大全・大学或問』、京都中文出版社、1993、p.373。

とが明確に示されている。鬼兒の復讐というプロットを強調し、詳しく描いた理由も分かる。つまり、読者に因果応報という意図を伝えるために、敢えてこう設定したのであろう。以上のような改変によって、「鬼兒」の描写が細かく、勸善懲悪の教訓性が深いという特徴を持つこととなった。

一方、『夜窓鬼談』の成立時代からみると、明治期は、西学東漸の時代とも称され、啓蒙風潮が進むにつれて、伝統的な漢学と新しい西洋学の価値観の衝突がいよいよ激しくなっていた。言文一致運動が起きたことにしたが、口語の小説は民衆に受け入れられ、昔からの漢文小説の勢力は少しずつなくなっていった。明治十年代、漢学と漢文は一時復興することになったが、時勢の凋落は止まらない¹⁹。西洋学が盛んに行われている当時に、数多くの若者は伝統の漢学を捨てて、西洋学を選んだ。この現象の対策として、漢学者の石川鴻斎が『夜窓鬼談』という作品を書いたのだと考えられる。これは凡例と上巻の序からうかがえる。

凡例には「欲使童蒙學漢文者僅識熟語耳」という一句があり、創作の目的は漢文を初めて学んだ人々に熟語を教えてあげるだけだということが分かる。また、上巻の序の中にも「夫教誨人，自有方，從其所好導之，其感亦自速。若以所不好誘之，徒費辭而終無益爾。余修斯編，欲投其所好，循循然導之正路，且雜以詼諢，欲使讀者不倦，且為童蒙綴字之一助了。」という文がある。教育することには方法があり、学生の興味があることから教えると、即効性があり早いのだ。逆に興味がないことからすれば、教師の力が無駄になる。この小説は、人々の好むことを取り上げて作ってきたのである。読者へ正しい道に導くために、諧諢の内容も加え、読者に飽きさせないようにする。漢文の啓蒙に役立てることが望ましいということが記されている。以上の二句からみると、石川鴻斎による漢文の啓蒙及び、人々の好む怪談を用いて漢文を修得させようとした意図が明確に見られる。

さらに、『夜窓鬼談』には訓点と挿絵がある。挿絵があれば、『夜窓鬼談』は単なる小説だけではなく、芸術品としての収蔵価値も上昇した。こうすると、読者も引き付けやすいだろう。その上で、作品には訓点をつけ、数多くの人に漢文の読み方を教えることもでき、漢文の教育を広げることもできるだろう。

つまり、作者は漢文の教育のために怪談を創作し、この小説を通じ勸善懲悪という教訓を人々に与え、特に若者を正しい道へ導こうとしたのだと考えられる。

¹⁹ 松浦鈴「文明の衝突と儒者の立場—日本における儒教型理想主義の終焉—」、『幕末維新論集 11・幕末維新の文化』、吉川弘文館、2001、pp.3-35。

8 終わりに

本研究では、明治漢文怪異小説集の『夜窓鬼談』の「鬼兒」を分析し、手本である落語の「もう半分」との異同を比較した上で、改作方法と創作理由を研究することを試みた。

その結果、「鬼兒」は「もう半分」から影響を受けたが、作者の石川鴻斎の改編によって、独自の特徴を有していることが明らかになった。その特徴とは、(1)「鬼兒」の演劇性は減少したが、物語の内容はより長く複雑になり、特に勧善懲悪の意識が強調された。(2) 文芸と文学の表現手法の違いにより、「鬼兒」は「もう半分」に含まれている「鬼索債」の要素だけを取り上げ、そのオチを削ることとなった。(3) 小説の表現力を強め、読者に心的体感を与えている。例えば、鬼兒の復讐の部分は短い三句や四句で畳みかけていたほか、徐々に近づく復讐への歩みも、「もう半分」よりさらに豊かに表現され、読者視点からの悪を裁く心理を満足させている。

系譜と流れを遡ると、この物語の成立背景がうかがえる。すなわち、「鬼兒」は、中国の「鬼索債譚」が源流であり、仏教の「殺生譚」及び、各地の民話・伝説と融合して成長してできたものだということである。その中に、「因果応報の思想」「不孝は悪とする」という江戸の町人意識なども確認できる。

そのほか、『夜窓鬼談』の凡例と序に書いている内容及び、挿絵と訓点が付けていることから、作者の創作目的は明確になっている。これは、漢文の啓蒙に役立て、若者に勧善懲悪という教訓を与えるために、書かれたものである。

つまり、「鬼兒」は、仏教の因果、転生思想及び、中国系物語に基づき、落語からヒントを得て、町人の道徳観と俗信などの要素を融合した上で作られてきた教訓話であると考えられる。

参考文献

- 石川鴻斎著、小倉斉・高柴慎治 訳註、『夜窓鬼談』春風社、2003。
石川鴻斎著、吾妻健三郎 編、『夜窓鬼談』東陽堂、1889。
後小路薫、『勸化本の研究』和泉書院、2010。
王三慶ほか 編、『日本漢文小説叢刊』（第1輯・第2冊）台湾学生書局、2003。
大隅和雄ほか 編、『増補日本伝承架空人名事典』平凡社、2000。
近藤瑞木 編、『百鬼繚乱：江戸怪談・妖怪絵本集成』国書刊行会、2002。
胡廣ほか 奉勅撰、汪份 増訂、吉村晉 [秋陽] 點、『和刻本四書大全1 大学章句大全・大学或問』、京都中文出版社、1993。
坂本信幸ほか 編、『論集古代歌と説話』和泉書院、1990。

- 作者不詳、『湖海新聞夷堅續志』中華書局、1986。
- 桜井徳太郎 編、『民間信仰辞典』三松堂印刷株式会社、1980。
- 斎藤希史、『漢文脈の近代』財団法人名古屋大学出版会、2005。
- 堤邦彦、『江戸の怪異談』株式会社ペリかん社、2004。
- 暉峻康隆ほか 編、『口演速記明治大正落語集成』（第五巻）講談社、1980。
- 中国社会文化学会、『中国—社会と文化』第二十七号、2012。
- 中込重明、『法政大学大学院紀要』第30号、法政大学大学院、1993、pp.238-220。
- 長澤規矩也、『長澤規矩也著作集』第五巻汲古書院、1985。
- 西田耕三 校訂、『仏教説話集成』（一）国書刊行会、1990。
- 西田耕三 校訂、『仏教説話集成』（二）国書刊行会、1990。
- 福田素子、「鬼討債説話の成立と展開—我が子が債鬼であることの発見—」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、東京大学文学部中国語中国文学研究室、2006、pp.23-47。
- 福田素子、「落語『もう半分』に見る中国怪談・討債鬼故事の受容と変容」『中国—社会と文化』第27号、中国社会文化学会、2012、pp.212-226。
- 松浦鈴、「文明の衝突と儒者の立場—日本における儒教型理想主義の終焉—」、『幕末維新論集11・幕末維新の文化』、吉川弘文館、2001、pp.3-35。
- 民俗学研究所 編、『総合日本民俗語彙』（第1巻）平凡社、1955。
- 村山吉廣、『漢学者はいかに生きたか：近代日本と漢学』大修館書店、1999。
- 湯浅邦弘 編著、『江戸時代の親孝行』大阪大学出版会、2009。
- Wolfram Eberhard 著、王燕生ほか訳、商務印書館、1999。